世田谷パブリックシアター
三軒茶屋発、地域の劇場による活動紹介冊子［キャロマグ］
Vol.3 Nov.2013
2013年11月号

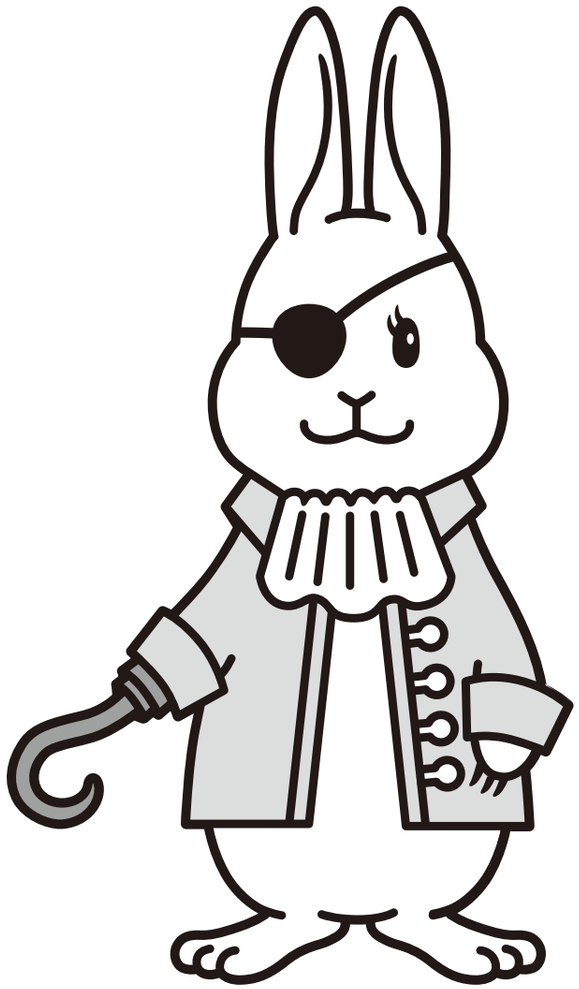
# CarroMag.

大海原へ
漕ぎ出そう!

ワークショップ・公演レポート

## ユース・パフォーマンス2013
## トバズニハ『コンパス グルグル』

# 『キャロマグ』ってなに？



三軒茶屋のキャロットタワーにある世田谷パブリックシアターには、ちょっとややこしいのですが、組織名と同じ「世田谷パブリックシアター」（600席）と「シアタートラム」（200席）という2つの劇場があり、年間を通じていろいろな演劇やダンスの作品を上演しています。

ですが、世田谷パブリックシアターの活動はこうした劇場での上演活動に留まりません！3つある稽古場や、セミナールーム、世田谷区内の小中学校や児童館、高齢者施設などで、小学生からお年寄りの方まで、ありとあらゆる方たちが参加できるレクチャーや演劇ワークショップを行っています。

キャロマグは、そんな世田谷パブリックシアターの、通常目に留まることの少ないこうした活動を不定期でご紹介する冊子です。オレンジ色のキャロットタワーにある劇場の冊子だから、キャロットマガジン。それを短くしてキャロマグ（CarroMag）。ご案内をつとめるのは、うさぎのキャロちゃんです。

一気にいろいろご紹介はできませんけれど、これをお読みのみなさんに、少しずつ世田谷パブリックシアターの活動を知って頂きたいと思っています。もし、ちょっとでもご興味をもって頂けるような内容がありましたら、今度はぜひ参加しにいらしてくださいね。

CarroMag. Vol.3 | Nov.2013

CONTENTS


ワークショップ&公演レポート

**ユース・パフォーマンス2013**
**トバズニハ『コンパス グルグル』**

| | | | |
|---|---|---|---|
| | トバズニハとは？ | | 2 |
| | PLAYBACK 2012 | | 4 |
| PROCESS | 『コンパス グルグル』ができるまで | | 8 |
| REPORT | 『コンパス グルグル』中高生レポート | 千葉ゆり | 12 |
| from Director | トバズニハの正体 | 伊藤キム | 13 |
| from Instructors | 「存在する」を思考する | 伊豆牧子 | 14 |
| | 再発見、夏 | 今井朋彦 | 14 |
| | 生きる——解のない問いに向き合う | 川瀬浩介 | 15 |
| | 未知、未来に開かれた場から | 杉山 至 | 15 |
| TALK | トバズニハ『コンパス グルグル』アフタートーク | | 16 |
| REVIEW | “自分にしかできない何か”を探す航海 | 高橋彩子 | 22 |
| from Staff | 劇場は冒険する場所 | 清水幸代 | 23 |
| CarroMag. Information | 近日開催予定の主なイベント・ワークショップ | | 24 |
| | 学芸スタッフから | | |
| | おまけマンガ『たまにはこんな役 #3』 | | |
| | 編集後記 | | |

YOUTH PERFORMANCE

# 人と同じことは、しない。
# カラダ・コトバ・ココロの
# カケラを拾い集めた、
# 私たちだけの表現が、ここにある。

世田谷パブリックシアターでは、2012年から、ユースメンバー（中学生・高校生）によるパフォーマンス・グループ“トバズニハ”を結成し、シアタートラムで新作パフォーマンスを発表しています（グループ名の“トバズニハ”とは“飛（跳）ばずにはいられない”という衝動的で躍動的な様子を意味しています。）。

ダンサー・振付家の伊藤キムさんを総合演出に、パフォーミングアートの第一線で活躍する多彩なアーティストを講師に迎え、ダンス・演劇・音楽・美術など様々なジャンルのパフォーマンスを学びながら、作品を創作するプログラム。表現者としてだけでなく、ひとりの人間として大きく成長することを目指す試みです。

今号では、そのユースパフォーマンスを大特集。中高生たちの「飛ばずにはいられない」衝動が、パフォーマンスという形で躍動する様をお伝えしたいと思います。

# PLAYBACK 2012

## 2012年のトバズニハは……

### 「トバズニハ宣言」

わたしたちトバズニハは、
「とばずにはいられない！」
を合い言葉に、
体やら声やら心やら
ナンヤカンヤ
全部ひっさげて、
歩いて走って泣いて笑って
世田谷から世界に
飛び出すのであります！

トバズニハ　新作パフォーマンスフライヤー　2012年

楽しいことはすぐ忘れるけど、つらいことはずっと覚えている。わざわざつらいことをやろうとは思わないけど、でも楽しいことばかりじゃ何も残らない。自分自身をどんどん追いつめて、心に「美しい傷あと」を残してこそ、輝く未来への糧になるはず。トバズニハのメンバーには、そういう夏にしてもらいたいと思う。そして劇場に足を運んでくださったお客さんの心にも、何らかの「あと」が残ってくれたらいい、そう思う。　伊藤キム

---

2012年08月14日（火）　シアタートラム

［総合演出］伊藤キム（振付家）
［共同演出］棚川寛子（舞台音楽家）　楠原竜也（振付家）　杉山 至（美術家）

［出演］　トバズニハ（中学生・高校生メンバー）
岡本花乃晏／栗山亜樹／七里海流クノー／千葉ゆり／中島詩織／中村博美／野口彩花／野口夢花／宮本真那／柳田優樹／吉田 恵

YOUTH PERFOR-MANCE 2013

ユース・パフォーマンス2013

# トバズニハ『コンパス グルグル』

**仲間たちと旅に出る。でもどこに向かうのかわからない。**
**コンパス＝羅針盤の針はあっち向いたりこっち向いたりのグルグル状態で役に立たない。**
**どこに行くの？ 何をするの？ 何に出会うの？ わたしたち、どうなるの？**
**「仲間たちと旅に出る。どこに向かうのかわからない。でもここに安住はできないんだ。**
**よっこらしょ、右往左往、そしてグルグルグルルルルル…」**

**伊藤キム**

---

今年度（2013年）は、総合演出にコンテンポラリーダンスの振付家の伊藤キムさん、講師として、振付家・ダンサーの伊豆牧子さん、俳優の今井朋彦さん、音楽家の川瀬浩介さん、舞台美術家の杉山至さんを講師に迎え『コンパス グルグル』という作品を発表しました。参加者を一般公募で集め、4月に体験ワークショップを実施。その後、トバズニハに参加したいかどうかの意思を確認し、出演者を選考。今年は、最終的に10人のメンバーで創作をスタート。約30回のワークショップを重ね、作品『コンパス グルグル』を上演しました。

PROCESS

## ユース・パフォーマンス2013
# 『コンパス グルグル』ができるまで

2013年3月　4月　5月　6月　7月　8月　8月18日、19日

3月上旬
### 公募開始

演劇に興味がでてきたときに、学校で募集の紙が配られて、運命だと思った。（澁谷）／将来のためにもやっぱり応募しよう!!（宮本）／自分の殻を破りたかった！（板）

4月20日、4月21日
### お試しワークショップ

30名の参加者が集まり、2日間にわたり体験ワークショップを開催。ダンスWS（伊藤キム）、演劇WS（今井朋彦）、美術WS（杉山至）など。伸びたり、縮んだり、ゆっくり動いたり、すばしっこく動いたり、様々な形をつくってみたり、人のからだのすきまをくぐってみたり、日常の生活のワンシーンをダンスにしてみたり、発声練習をしてみたり。出演希望は25名。

なるべくいろんな人にしゃべりかけておもしろかった。通知を待つのがドキドキだった。（寺田）／男子だと思われて、女子が誰も声をかけてくれなかった。（澁谷）／初めての感覚。ほんとにほんとに新鮮で刺激的！ 来ていたメンバーは知り合いいなかったけれど、すぐに仲良くなった。（板）

### 出演者の選考と決定（10名に）

あ！ やった！ 受験＆トバズニハ、絶対両方がんばる！（宮本）／もしかして私ってスゴイ?!とか思っちゃってた（尾間）／手紙がきて、うれしくてしかたがなかった。（丸山）

5月19日
### 顔合わせ＆ワークショップ 1「ダンス＆身体づくり」

- 初めてメンバーとスタッフが集合！
- からだを他の人にゆだねてみたり、思いっきり走り回ってしっちゃかめっちゃかな動きをしてみたり。
- この日にやった「眺める」という動きが、作品にも繋がった。

5月26日
### ワークショップ 2「自己紹介＆身体づくり」

- 自己紹介と他己紹介。
- 空間の中で均等に歩く。
- 人の身体を支えて運ぶ。

体験ワークショップの時も思ったけど、このワークショップ、なんだか普通じゃない。これから何が起こるんだろう…（尾間）／ここでみんなが男子って思っていたことを知ってビックリした。（渋谷）

自分の名前が載っている喜びと、責任感を感じた。（尾間）

6月2日
### ワークショップ 3「ダンス＆演劇」

- 自分の身体の重心を感じる。
- ペアになって骨盤を使って歩く。
- 体重移動の意識を磨く。
- 相手の言ったことを完全コピー。
- 狙った位置に自分の息を置く。

生命の息吹みたいな。（板）／「息」にも色々な息がある。自分の置きたい場所に、一番届きやすい息の強さや速さや形を探る。（吉田）

相手が自分のダンスを見て何を思ってるんだろう…!?（廣瀬）／みんなとなかよくなれてきてる。（寺田）／視野が広がった!?気がした！（宮本）

6月9日
### ワークショップ 4 「物語づくり」

- 連想ゲームからのダンス。
- 「コンパス グルグル」とはなんぞやと考える。

今、何をすべきか。（三宅）／頭が洪水。（寺田）／意見が出たり出なかったり。もっと積極的にならないと…！ってみんながおもってた！（宮本）

6月16日
### ワークショップ 5「音楽」

- 稽古場で足跡探し。
- 空気を鳴らす。
- 音を楽しむ。
- 表現する＝相手の声を聞くということ。

今までこの稽古場で過ごした人たちの多さを改めて感じた。（坂）／稽古場の床をじっと眺めていると、沢山の足跡が見えてきて、なんだかその空間の歴史を見ているよう。（吉田）

細くて鋭い音を出したい。空気が鳴ることは無いと思っていたのに。（三宅）

### チラシ完成！

6月23日
### ワークショップ 6「ダンス＆動きづくり」

- 全力氷鬼。
- 言葉のキャッチボール「こんにちは」ゲーム。
- お互いの顔と顔を寄せ合い、距離を変えないように動く。
- 音もなく倒れろ！
- 目に見えないボールを相手に渡す。

6月30日
### ワークショップ 7「実況、オウムガエシ」

- 身体の重点を変えて前に進む。
- 高い、低い、を意識して声を出す。
- 中継＆ダンス。
- 擬態語・擬音語も含めてやってみる。
- 鏡を使ってダンスする。

みんなのちがう一面もみれたかも！（宮本）／スタッフの人とあらためていろいろ話をした。（廣瀬）／ぐっと距離がちぢまった。（坂）

7月7日
### ワークショップ 8 ＋ 交流会「音楽」

- 発声した音の変化を楽しんでみる。
- タコハチゲーム。
- 声だけで喜怒哀楽を表現。
- 「あかさたなはまやらわん」の録音。
- 4/4拍子の中に、違うリズムをぶち込む。
- 音で対話。
- 台風を無声音で表現する。

7月14日
### ワークショップ 9「美術」

- セノグラフィーのワークショップ。
- Performing artsとは？
- Scenographyとは？
- 共感覚とは？
- シャープ in ダーク。
- 触覚のスケッチ。
- スケッチ→ダンス。

メンバーの中に、異端の考えが生まれた。（三宅）ほめてもらえると1人1人自分らしさがでてくる。（寺田）

### 衣装の採寸

言葉が目に見える瞬間が初めての感覚。（藤中）

7月15日
### ワークショップ 10「美術」

- 逆立ちの練習。
- 交互にジャンプ。
- 進みましょう（二人組で前へ進む）。

### 中高生レポーターの千葉ゆりちゃん現る！

メンバーをこえる新しいおねえさんが！（廣瀬）

7月25日〜8月15日
### 集中ワークショップ

毎日、キツかったけど充実してた。（丸山）／みんな思うところにいかなくていらいらしてて、舞台にあげられるか不安。キムさん何かんがえてるんだろう…（寺田）／みんなに性格変わったよねって言われた。これが俺だよ！ 本番が近づくにつれて場がピリピリしてきた。こわかった…。（澁谷）／レッスン後に自主的に集まって、反省や舞台について話し合ったりした。（坂）／追い込んで追い込んでの繰り返しの後、自分が精神的にも、体力的にも色々な面で強くなっている事を感じた。（尾間）

7月21日
### ワークショップ 11「ダンス＆動きづくり」

- 9つのポイントを意識して身体を動かす。
- 拡大＆縮小（一点をみつけて、ゆっくりと手を伸ばす。引っ込める。）
- トレーラーに収録する動きと言葉を練習。
- コンパスグルグル感を映像に詰め込む。

### HPに掲載するトレーラー映像を撮影

目に見えないガラスのケースの中にいるみたい。（三宅）

8/4にレポーターとして初めてWSを見学。キムさんが厳しくなっているような気がしたのはその時。（ゆり）

8月16日、8月17日
### 仕込み＆リハーサル

個人的にアフタークと批評文が強敵だった。（ゆり）

こんな時期に、講師の方とケンカ。気づくのに時間がかかりすぎた。（三宅）／舞台は出演者だけじゃなくて、こんなにも多くの人が支えて出来てるんだなぁと思うと、今まで以上に舞台の魅力を感じた。（尾間）

緊張していた印象。けっこう遅くまで、みんなが考えて、悩んでいた。（ゆり）

生きてる実感があった。何かをさいしょに始める人になりたくなった。（寺田）／終わった後の興奮がすごくて、おさえるのが大変だった。やっているときはけっこー無心。（澁谷）／緊張ゼロ！ 弾けるパワー!! 人生の良き思い出というか、私の一部になりました。（坂）／緊張とか、お客さんの上演前の声とかそういうもの全部ひっくるめた空気を楽しめていた。この日初めて、非日常を知れた気がした。（尾間）／本当に、しあわせ！を感じた！（宮本）／打ち上げで号泣！（丸山）

8月18日、19日
### 公演！

# 『コンパス グルグル』中高生レポート

## 千葉ゆり

ぐるぐるぐるぐる。私たちは繰り返しの中で生きている。

「同じような毎日に、なんだかすこし飽き飽きしない？　ならいっそ、そんな日常から抜け出して、ちょっと旅に出てみようよ！」
…そう言うと、トバズニハは観客を巻き込んで、世田谷、日本、そして世界を飛び出し、大気圏を突破して、宇宙の旅へと出発したのだった…

というようなプロローグがこの作品にはあるのかもしれません。
初めて稽古を見学させていただいた時からこの作品にはSFのような雰囲気を感じていました。また昨年と比べて演劇的要素が多く、作品全体がひとつの大きな物語になっているようでした。それに伴って伝わってきたのは「得体のしれない不気味さ」です。最後に暗闇の中で横たわっている彼らを観ると、果たして彼らは本当に人間だったのか、それさえも分からなくなるような危うさを感じました。しかし、それとは対照的に全員で歌を歌う彼らの表情や動きは、とても可愛らしく、ユニークで、おもわず笑ってしまいます。このように舞台の上でいろいろな顔を見せてくれるトバズニハのメンバーは一人一人がとても個性的で、それぞれ違った輝きをもっています。それだけでなく、その個性には深みがあり、観ている私たちを作品の世界へ引き込む力を感じました。また、作品の中で発する言葉ひとつをとっても、一人一人が真剣にその言葉と向き合っているのが印象的でした。全31回のワークショップで自分たちが出会ったものをひとつひとつ、しっかりと咀嚼して自分の中に取り入れたものが、じわじわと滲み出し、この作品を形作っていたように思います。そのため、どんなに小さな動きや声にも、きちんと彼らの意志が宿っています。作品のどの瞬間を切り取っても、メンバーが自分の中で咀嚼した「何か」を詰め込んで私たち観客に届けようとしていました。「何か」という言葉で表現してしまうとかなり抽象的になってしまいますが、あまりにもいろいろな瞬間がありすぎて、一つの言葉として形容することができませんでした。ですが、作品全体を通してみると彼らは必死に「今のままではいけない。」ということを私たちに投げかけていたように感じています。
さて、宇宙の旅へと飛び出したトバズニハは、一体どこへ還り、どこへ向かったのでしょうか。それは誰にも分かりません。でも、等身大の彼らの表現は、観ていた私にも「きっと何かができる」という無限の可能性を示してくれました。もしかしたらトバズニハはこの作品で私の行き先を照らしてくれたのかもしれません。あとは私が勇気を出して、飛び出すだけ、です。

昨年のトバズニハには演者として出演していましたが、今回は立場を変えて中高生レポーターとして参加しました。初めてのことばかりで緊張しましたが、私のトバズニハに対する思いを、自由に、自分らしく、表現することができてとても楽しかったです！





# トバズニハの正体

## 伊藤キム（振付家・ダンサー）

いとう・きむ／1987年舞踏家・古川あんずに師事。95年「伊藤キム＋輝く未来」を結成。2005年バックパックで世界一周の旅に。11年「輝く未来」を解散。中高生向けのWSや、「おやじカフェ」のプロデュースも行う。京都造形芸術大学客員教授。

**「結びつける力」**
ダンスが中心ではあるが演劇っぽいところもあるし、かと思えば歌も歌う…トバズニハの舞台はいろんな要素が盛り込まれていてなかなかジャンル分類がしづらいが、これには理由がある。集まってきた中高生メンバーたちに、いろんな表現方法を味わい体験して結びつけてもらいたいからだ。
結びつけるってなんだろう？　こんな例を挙げてみる。イモ畑でイモを掘り起こすと、ツルがくっついている。それを辿っていくと別のイモが掘れる。たとえば学者や発明家は、イモ同士ではなく全く別のものを結びつけて新たな発見をもたらす。つまりものごとを多面的にとらえ、別の視点を探し当ててそこに自分なりの解釈を与えて世に提示するわけだ。
なにも中高生たちに学者になって欲しいとは思わないが、将来、彼ら彼女らが何を目指すにせよ自分の力で世界を切り開いていくためには、このような経験はとても大切だと思うのだ。創造とは、まったくゼロから始まるのではない。「いかにものごとを結びつけていくか？」そこがポイントだ。

**「教えずに待つ」**
そのために、ダンス・演劇・美術・音楽などさまざまな分野の講師が直接指導し、また中高生メンバーたちもあれこれ意見を出し合いながら進めていく。
講師陣は指導はするが「教えずに自然に出てくるまで待つ」ことも必要で、教えることと教えないことを、バランスとタイミングを計りながら繰り出していく。

**「基本が大事、遊びはもっと大事」**
学校の授業や部活と違うこうした試みは、どうしても基礎・反復練習といった内容を避ける傾向にある。しかしそれは間違っている。集団なら特にそうだが、どんな表現であれ、その現場にはしっかりした土台が必要で、それは「みんなで基本練習を積み重ねること」にほかならない。全員がその地平に立ってこそ初めて次のステップが視界に入るのだ。
そのステップとは、「基本を土台にいかに次に発展させられるか？」である。そこには常に遊びの要素が求められる。ある日の稽古後、メンバーたちが稽古場を掃除していたのだが、柄のないモップを足に履いて床を拭いて遊んでいたのが面白くて、そのまま作品でもやってみた。遊びが創造につながるのは楽しいものだ。

**「身体という道具で」**
舞台はナマモノだ。ナマの身体が登場し、声や足音が観客に届く。自分自身をある程度のレベルに高めて人前にさらけ出すのは、勇気のいる作業で簡単なことではない。しかし中高生時代に、自分自身の身体を表現媒体としてこのような体験をすることは、科学技術がより発達した現代においてはとても重要だと、ヒシヒシと感じるのだ。

## 「存在する」を思考する

### 伊豆牧子（振付家・ダンサー）

いず・まきこ／2000年秋1年間渡仏。03年「伊藤キム＋輝く未来」のダンサー、アシスタントとして活動。05年よりGRINDER-MANに参加し、作品の演出、振付、出演に携わる。近年は「WORLD ORDER」他の振付、演出、WS等活動の幅を拡げている。

既にユースの企画から1ヶ月が過ぎました。終わってみればあっという間の3ヶ月でしたが、できることとできないことを見極めるのに少し時間がかかってしまったと感じています。ちょっとしたことがすぐに影響するので、かける言葉や接する時には気を使いましたね。突発的でユニークな発想は自由で、ダンスに限らない演技や声を出すことにも臆することなく挑戦する精神を目の当たりにする等、刺激のある時間でした。課題に対してお互いにコメントしたり、自身の言葉で感じていることや考えることを伝える機会が多かったのはよい方法でした。実際に本番で舞台に立つのはメンバーなので、人任せにならない自分自身が舞台上でどうあるべきかということについては一人一人がよく考えたと思います。個性のあるメンバーでしたがこのことは社会生活においても同じことが言えると思うので今回の経験が今後に繋がることを願っています。

## 再発見、夏

### 今井朋彦（俳優）

いまい・ともひこ／1992年より文学座座員。様々な舞台のほか、『新選組！』『古畑任三郎』『相棒』などのドラマにも多数出演。2001年より舞踊家木佐貫邦子氏に師事し、コンテンポラリーダンスにも参加。桜美林大学芸術文化学群・演劇専修専任講師。

伊藤キムさんのコトバで、メンバーのカラダが動く。彼らの動きがまたキムさんのコトバを生む……まずはそんな時間が続いた今回の稽古場。今度は彼らにコトバを課してみる。するとカラダが止まってしまう人、カラダがコトバと離れてしまう人、新たなカラダを獲得する人、さまざまな反応を見せてくれる。そこでこちらも次なるコトバを考える……。

イメージをともなうコトバだからこそ、そのイメージがカラダを自由にもし、時に不自由にもする。それを一人一人見極めなければならない。一つのコトバに対して持つイメージは一人一人違うからだ。

正解のない関係だからこそ、奥深くておもしろい『カラダとコトバ』。その繊細でちょっと不可思議な関係を再発見した、2013年の夏でした。

## 生きる——解のない問いに向き合う

### 川瀬浩介（作曲家・美術家）

かわせ・こうすけ／音楽に光などの視覚要素を融合させた作品を制作している。08年度、NHK教育「からだであそぼ」音楽担当。10年に代表作《ベアリング・グロッケンII》が文化庁メディア芸術祭アート部門・審査委員会推薦作品に選出される。

自分が講師だなんて柄でもない——これが最初にお声かけ頂いたときの正直な気持ちだ。教育の心得もなく、ましてや子育ての経験もない僕が、娘や息子ほど歳の離れた若者達に伝えられることはあるのか？ そんな自問を繰り返しながら、立春のころ、来る邂逅を待ち侘びていた。

初夏、同じ時を過ごし始めてすぐにわかったことがある。彼らはもう「或る気付きの種」を携えていて、それが間もなく芽を出そうとしていた。僕はただ、目の前の肥沃な土地にそっと水を注げばよかった。

ところが時を経るごとに、講師としての使命とはかけ離れた思わぬ出来事が、僕の内に起きていたことに気付かされた。彼らと過ごしたその時間は、忘れかけていた「大切なこと」を僕に知らせてくれたのだ。そう、僕の「或る気付きの種」にも芽生えが近付いていた。そこに水を注いでくれたのは言うまでもない、彼らである。

秋分を迎えた今、想う—2013 年、夏—それは、僕の宝だった。

## 未知、未来に開かれた場から

### 杉山 至（舞台美術家）

すぎやま・いたる／国際基督教大学卒。在学中より劇団青年団に参加。2001年度文化庁芸術家在外研修員としてイタリアにて研修。現在は様々な舞台美術を手掛けている。桜美林大学・四国学院大学非常勤講師、NPO法人S.A.I.理事、二級建築士。

今回の舞台の美術は、参加者からのアイデアで膨らました部分が多々ある。演出の伊藤キムさんから出された船の旅というアイデアを元に、美術のワークショップでは、その言葉から想像するアイテムを持ち寄ってもらった。本や双眼鏡、ランプや砂や旅のイメージの色、等々。その素材や質感や皆がそれに込めた思いを元に空間の美術イメージを膨らませていった。それは、この企画に参加した若い彼ら皆の感性と創造力が共振して作り上げたイメージだ。

一方的に方法論を叩き込むという稽古ではなく、ワークショップを重ねながらみんなで作品を作りあげていく。他の講師のワークショップを覗きにいくと10代の若い感性が日々変化し、深化していくのをまざまざと感じた。自分が中学生だった頃は想像すらできなかったとても贅沢な時間。だが、このような劇場での贅沢な創造行為の時間からこそ未来のアートを生み出す若い種が育っていくのだと思う。

# トバズニハ『コンパス グルグル』アフタートーク

**『コンパス グルグル』千秋楽上演後、1時間近くにわたって舞台上で行われたアフタートーク。興奮さめやらぬ状態でのトークは、たくさんのお客さんを前にして、大いに盛り上がりました。**

千葉ゆり

三宅さやか

藤中樹音

尾間美千絵

丸山紗季

澁谷海麗

坂 朋香

廣瀬円華

吉田広大

寺田 凜

宮本真那

伊藤キム

## 変化するトバズニハ

**キム**｜（千葉）ゆりちゃんには昨日今日の2回の公演と、ゲネプロも観てもらったけど、いちばん最初に稽古場に来てくれたのはいつだっけ？

**ゆり**｜8月4日ですね。この中高生レポーターに決まる前にも、7月に1回遊びに来てます。最初に思ったのは、これは「怖い」作品なんじゃないかって。去年、私自身がトバズニハに参加していたこともあって、去年の作品との違いを大きく感じました。不気味さと、その対極にある明るさといいますか。表現の幅が大きくて、その魅力に圧倒された感じですね。日々進化しつづけるのがトバズニハの醍醐味だと私は思っていて、ゲネと本番でも違うし、昨日と今日の公演も全然違って、良いほうに大きく変化していく集団だなと。

**キム**｜「幅が大きい」というのは？

**ゆり**｜ラストシーンで、人が横たわってランプで照らされているところが、どうしても人間に思えないような雰囲気を醸し出している。かと思えば、「樹音タイム」ってみんな呼んでましたけど（笑）、彼が歌っていた独壇場のところではフフッと笑わせられるという。そういう幅が面白かったです。

**キム**｜「変化」という時に、稽古を重ねるごとに変化していく感じと、作品の中でいろいろなものに変化していくのとあるよね。

**ゆり**｜両方ですね。初めて稽古を見学に行った時は、個々にマイペースなメンバーが多いなというのが率直な感想でした。個性豊かなんだけど、あんまりまとまりが……ないのか？、と思ったりもして（笑）。でも何度かお邪魔させていただくうちに、マイペースだけどそれぞれ「進もう」とする意志を感じるようになりました。

**キム**｜印象に残っている場面はありますか？

**ゆり**｜個人的に、リンリンちゃん（寺田凜）の表現に一人の観客としては惹かれています。迷いがないというか。彼女の表情や動きが印象に残っています。

**寺田**｜……ありがとうございます（笑）。でもやっぱり昨日より、今日はちょっと弾けてやるって感じで、前を見るしかないなって思えるようになったんです。「迷いがない」っていうのはそれが表れてくれたのかな。

## 「船旅」というイメージから物語へ

**キム**｜もうひとつ何かシーンを挙げるとしたら？

**ゆり**｜本を読んで言葉を発するシーンが、昨日のダメ出しの後で変わって、今日は一緒に私たちも呑み込んでくれるような勢いと力強さを感じました。自分が発する言葉にひとりひとりが真摯に向き合っていて。深く咀嚼して、取り込んでから出すという。それも、投げるというよりは身体から滲み出る感じがしました。

**キム**｜そのシーンに関して、誰か何かある？

**メンバー**｜……

**キム**｜……勇気のあるやつはいないのか？（笑）

**坂**｜えっと、ハイハイハイ！

**メンバー**｜（笑）

**坂**｜えーと、あの朗読のシーンは、自分でつくった物語を読んでて、それを自分の中に吸収してさらに外に出すってシーンなんですけど、自分だけが行ってもダメで、相手との空気感が壊れちゃうから、「読む」ことと「聴く」こととのバランス感覚がすごく必要で。自分にも集中しなきゃいけないし、周りにも目を向けなきゃいけないっていう意識が大変でした。

**キム**｜他に誰か？

**藤中**｜本を自分の言葉にして、お客さんや外の世界にひろげていく。その時は自分の世界でもあるけど、他の人にも伝えて飛ばすというか。もっと（トバズニハの）みんなに伝えたくなった。そしたら今度はみんな以外のいろんな方向の世界にも伝えたくなった。そしたら何だか、その世界を、バーン、って……。そういうイメージでやってました。あのシーンは僕も好きです。

**キム**｜少し補足すると、この作品のテーマは「船旅」なんです。船に乗ってこの10人の仲間たちと旅に出る設定というかイメージで。で、まず稽古の中で、船旅から連想する言葉をメンバーたちに幾つか挙げてもらいました。何があったっけ？

**澁谷**｜「男前」（笑）。

**寺田**｜「嵐」。

**キム**｜……とか「太陽」「海」「波」とか。そういう言葉をもとに、それぞれ自分で物語をつくってもらったんです。それをあの場面で喋っている。本はその物語が書かれている道具といいますか、特にあの本に書いてあることを出そうということではなくて、自分の物語に出会うためのツールとして使っていいよっていう。それをだんだん自分のものにして、他の人たちとも共有していこう、という流れでつくっていったんです。

## 「もっとやれる」という気持ち

**キム**｜ゆりちゃんのほうから出てくる感想がわりと良い印象が多いんだけども（笑）、逆に、つまんないとか、物足りないとか、ちょっとよくわからないとか、そういうのはない？

**ゆり**｜そうですね……。最後、グルグルグル、ってなってる時に、昨日観た時は、もっと暴れていいんじゃないかなと。セーブしてる感じ？少し物足りないなと。あとは表情が曖昧だったり。ゲネプロの時は、どうしたの？、って思いましたね。緊張のせいなのか、硬くて、みんなの良さが出てなくて、明日の本番大丈夫かなと思ったんですけど、彼らはやってくれましたね。同年代がやってると思うと、いいものを見せてくれたな、って気分になるし。最初は怖いというか、星新一さんのSF小説を見ているような気持ちでした。よくわからないけど面白い。

**キム**｜みんな、最後のグルグルはどうなの？

**澁谷**｜グルグルの時は、暴れ足りないというか……。ぶつかるギリギリで通ったりするので、セーブしたところがあったのかも。

**ゆり**｜観てる側としては、もっと抗えないものに翻弄されてるトバズニハ、を観たかったかな、という気分ではあります。もっと翻弄されてほしい、っていう欲望というか。

**宮本**｜確かに、自分が怪我する以上に、他の子に怪我させたらどうしようっていうのがあって。自分が暴れたらいいというものではなくて、怪我しないように、でももっと出せないかな、という反省はありました。今日の公演はゲネプロよりは行けたけど、確かにまだまだ行けたなあ。やっていくたびにそう思います。

**ゆり**｜まだ上に行けるって可能性を感じてるのはあるよね。そのフラストレーションを溜めながらの演技として観ると、それもそれで面白かったし、この作品はいろいろな楽しみ方ができたと思う。私は去年、彼女

（宮本）と一緒にトバズニハに出てたんですけど、パワーアップしてて、同い年なのに惚れ惚れしちゃいますね。

**寺田**｜私もグルグルでは、やるたびに、もっといけたかなと思って。自分の身体のちっちゃさがわかるというか、まだ動き切れない、出し切れないんだなっていう。出したいものはあるのに。って最後寝るシーンで思いました。

**ゆり**｜自分の想いと身体のギャップに翻弄されているということで、それもまたリンリンちゃんの中でグルグルしてるんだと思うし、ある意味では、この作品のテーマに沿った想いなのかもしれないね。やってるみんなにしかわからない想いもあっただろうし、観てるほうとしては、もう少しやりたいっていうその気持ちを知れて嬉しい。

**藤中**｜リンリンの言うことは僕もすごくわかって、普通の稽古だったら「よしできた！」っていう時が「よっしゃー！」って感じで嬉しいんです。でも通し稽古をやると、そのたびに必ずどこかで、「あー、もうちょっとできたのに」とか「こうしたらよかった」とかあるんですよ。100％満足したのは1回もなかったと思います。そういう意味では、まだいける、まだ80％くらいだとか、それが100％に、今日はなれた、のか……えっと、100％です！（笑）

**場内**｜パチパチパチ（拍手）

**キム**｜いや、100％で拍手はないでしょ（笑）。120％に行ったらね。

**藤中**｜じゃあ150％で！

**場内**｜パチパチパチ！（拍手）

**吉田**｜オークションみたいだね（笑）。

## 「完璧」をやっても意味がない

**キム**｜もうちょっとあそこはやれた、とか他にある？

**尾間**｜最後のグルグルとか、あとハチャメチャになるところで、表情をつけるというか、もっとバカになるという、稽古場では「バカ作業」っ呼んでた動きがあるんですけど、昨日のほうがブサイクになれたかなって（笑）。顔芸が大好きすぎてよくやってるんですけど、今日は少し抑えちゃって、もっとバカになりたかったかな。

**吉田**｜僕は最初、桟橋のところでずーっと座ってる役なので、眠くなってくるんですよ。いや、もちろん起きてますよ。でも意識っていうより身体が眠くなってきちゃうんですよ。関節とかが重くなって。緊張もあると思うんですけど。そのぶん、橋の上で演じる時は、もっとがっつり暴れないと、その後が曖昧になっちゃう。ただ樹音と向き合ってやるフリを昨日ミスったんですけど、ものすごく悲しそうな顔をしてたよって言われてたから、だから今日もミスったんですけど、笑顔で頑張りました（笑）。

**ゆり**｜よしこう君（吉田広大）は最初の音出しですごく悩んでたよね。どう出せばみんながどう動けるか、呼吸を合わせるために。悩み多き、という感じだなと思って微笑ましく観てました。

**吉田**｜最初は空き缶とか、プラスチックのコップとか、紙とか、ぷーぷー鳴る犬のおもちゃとか、そういうのがいっぱい置いてあって、必死に音を出そうとしたんですけど……ずーっと出てる音がないと踊ってる人は難しいんですよ。それで悩んで、そしたら昨日、長い文鎮が用意されてて、アレのおかげでなんとかやってこれたかなって思います。文鎮に助けられました。

**キム**｜他にはないですか？

**メンバー**｜……（静寂）

**宮本**｜何もなければ、じゃあ完璧だった、てことになっちゃうけど……

**吉田**｜そりゃまずい（笑）。

**寺田**｜えっと、樹音タイムで笑っちゃった人いたよね？（笑）

**澁谷**｜あそこは笑いを堪えるの大変だよね。

**尾間**｜私、ずっと舌噛んでた。

**吉田**｜僕が教えたんです。舌噛んで何でもない顔をしてたら笑わないって。

**三宅**｜使えるよね！

**キム**｜本来なら、いわゆるプロのパフォーマーがやった舞台の後で、こういう話はお客さんは聴きたくないですよね。だったら舞台でやれよってことだから。だけどトバズニハのメンバーは中高生で、あれがうまくできなかった、もっとああすればよかった、っていうことも含めてのパフォーマンスだと思うんです、僕は。今日観てても、不十分だなっていう点もたくさんあったんですね。稽古の時も、うまくいく時もあればそうじゃない時もあるし、本番も、昨日と今日で、いろいろなんですよ。あそこをもうちょっとやれば完璧なのに、と思うところもあります。……ありますけど、彼ら彼女らがそこでできたとしても、それって「ああ、中高生なのにすごいね」で終わっちゃうんですね。そんなの観ても面白くないと僕は思うんです。逆にできなかったら、何が足りなかったのか、何を追求できなかったのか、っていうことを発見することのほうが大事で、のびしろを感じさせると思いますし、今ここで「完璧」をやっても意味がない。その先の人生で、どんどん上にのぼりつめてくれることを期待する、というのが正直なカミングアウトです。

## 挑戦すること

**キム**｜「擬音姉妹」のシーン、今日観てびっくりしたんだけど、突然新しいものが増えてたよね？

**坂**｜昨日の公演が終わってみると、どんどんやりたくなっちゃって、やってやろうじゃないかってことで、今日は弾けました。

**キム**｜あー、僕が言ってるのは「はい」っていう言葉のことで、あれでちょっと長くなったよね（笑）。微妙だけど、あれは言葉なんだよね。擬音とはちょっと違う。擬音以外のもを言っちゃいかんとは言わないけど、大きく外れちゃうわけですよ。新しいことに挑戦しようとする気持ちは買うけど、もしもやる場合は、事前に訊いてね、演出家に。

**場内**｜（笑）

**キム**｜それでやってみて、良ければオッケー出します。今日は何も事前になかったから、なんだこいつらって（笑）。姿勢は買うよ。

**坂**｜申し訳ございません。

**寺田**｜はい……

**キム**｜まあいいや（笑）。

**寺田**｜でも今日楽しかったよね。

**坂**｜すっごい楽しかった。

**キム**｜あ、でもね。言われたことしかやっちゃいけないというふうに思ってほしくはないですね。先走ってやっちゃうことも必要で。（客席に）そう思いません？

**場内**｜パチパチ（拍手）

**キム**｜良かったね。

**寺田＆坂**｜ありがとうございます。

**キム**｜言われたことしかやらないのじゃなくて、自分の力で壊していくっていう。ある意味、勝手気ままに発展させていくことができる場所だと思うんですね、ここは。

## 即興と演出の割合は？

**キム**｜お客さんのほうからご質問があれば伺いましょう。

**観客**｜インプロビゼーションと、作り込んだ部分とは、どのくらいの比率になっているのでしょう？

**メンバー**｜（異口同音に）インプロビゼーションってなんですか？

**キム**｜即興のこと。その場でパッとやるような即興的な部分と、予め決められている部分のバランスがどれくらいかって質問だね。

**メンバー**｜（相談中）

**キム**｜誰か代表して答えて。

**丸山**｜たぶん即興が7で、決められたのが3くらいだと思います。

**坂**｜段取りとか物事の順番とかは決まってるけど、やってることは日に日に違うから、ほとんど即興ですね。

**キム**｜なるほど。じゃあ僕のほうから言いますと、例えば、さっきの本を拾って喋る朗読のところ、段取りは全部決まっています。ただし、どのタイミングで誰が何を喋るかは決まってません。あと最後のほうで、羊飼いの2人と羊の4人がいるシーン。あれも段取りは決まってますけど、誰と誰が右左のどっち、みたいなのは即興でやってます。ただ僕の中ではほぼ決まっています。だから数字で言うと、8割振付、2割即興。

**メンバー**｜えーっ!?（笑）

**キム**｜ま、人によっていろいろ考え方はあると（笑）。

## メンバーに期待すること

**観客**｜中学生高校生が、こういうワークショップを通して、最後にこうやってチケットを売って公演をして、メンバーそれぞれに年齢的にも成長したり、将来のことを考えたりする時期で、いろんなことを得ていると思います。演出家の立場では、子供たちに何を期待しているんでしょう？

**キム**｜えーと、いつだったかな。稽古場で、昨日何人かから訊かれたんだけど、って話したの覚えてる？

**宮本**｜「これ合ってますか？」みたいな質問をキムさんに対してメンバーがすることが多くって、そうやって疑問を持つことはまず大事だけど、それを私に訊かないでくださいと。自分で考えてやってみてダメだったらそれは言うから、表現として出してみてくださいという話ですかね。

**キム**｜つまり、いちいち訊くなってことですよ（笑）。ある振付を発展させていきたいと思った時に、それをみんなに投げるんですね。そこでもうちょっと足してみてもいいですかって幾つか質問があったんですよ。それは訊く前にやってほしい。自分で問題を解決しようとする姿勢を養いたい。そうしないと、出されたものをこなすことしかできないんですね。言われたことしかできない。そうなっちゃうと、才能とか力が伸びないまま尻すぼみになっちゃうんで、自分の力で突破していくことを期待します。

## 参加した動機

**キム**｜他にどなたか質問はありますか？
**観客**｜おつかれさまでした。みんながどうしてこの企画に参加しようと思ったのか聴きたいです。
**キム**｜なるほど。じゃあ手短にひとりずつ。
**三宅**｜トバズニハに参加しようとした理由は2つあって。ひとつはとても楽しそうだなと思ったんです。シアターダンスをやってるんですけど、また違うジャンルに飛び込んでみようかなと思ったのがひとつです。もうひとつは、どうしても受かりたい志望校があって、そこにいくための近道となるライトを探しにきたんです。これ、超言いづらい……（笑）。そういう感じです。
**藤中**｜僕は舞台に立つ仕事がやりたくて。去年、友達が出てたトバズニハの公演を観て、わー、すげえ、ほとんど同い歳なのに……と思って、舞台に立つのはどういうことかを学びたくて来ました。
**尾間**｜私も舞台に立つ仕事をしたいと思ってて。音楽が鳴ると踊りたくなるし、演劇部に入ってて、演じることが好きだったから。
**丸山**｜私は演劇がすごく好きでやりたかったし、世田谷パブリックシアターのワークショップでチラシをもらって興味を持ちました。
**澁谷**｜俺も似てて、テレビ関係、舞台関係の仕事に就きたいと思ってて、学校でこのチラシが配られて、面白そうだと思ってやってみました。
**坂**｜私は将来はそういうふうじゃないんですけど、歌うこととか、踊ることとか、絵を描くこととか、芸術が好きでやってみようと思ったのと、あと自分を変えたいなと思って。大事なところで収まりがちなところがあったから、飛び出したいなと思って来ました。
**廣瀬**｜私はミュージカルが好きで、そういう人たちみたいになりたいなと思って応募しました。
**吉田**｜僕はさっきの2人と同じように、舞台に立つ仕事がしたいと思っ……

**澁谷**｜ん、俺は？　俺もそう言ったんだけど。
**吉田**｜あ、ごめん（笑）。3人と同じように、舞台に立つ仕事がしたいなと思って、去年出た人に話は聴いてたんですよ。それで、無料でトラムに立てると思って参加しました（笑）。
**寺田**｜私は音楽とか絵とかダンスとかいろいろ好きで、ひとつに絞れないっていうのもあったし、しかもこんなに長い期間あんな刺激を受けたら、何か見つけられるんじゃないかと。それで来ました。
**宮本**｜私はこの10人の中で唯一、去年も出演させていただいたんですけど、学校とか家とかじゃできないこと、変なことを、マジメにやれる場だなと思って。そういう空間のほうが居やすいから、絶対また舞台に立ちたいと思ってメンバーになりました。
**キム**｜舞台に立ちたいとか、それなりの動機があるんですよ。あるんですけども、僕としては、彼らが舞台に立って、いわゆる表現者として生きていくことだけではなくて、ひとりの人間として非日常を体験することを、みんなに課しているというのがあります。あんまり優しくないんですよ（笑）。けっこう厳しいでしょ？
**メンバー**｜（反応それぞれ）
**キム**｜甘くするところもあるけれど、ぐっと締めるっていう。最近の学校や家庭もですけど、若い人たちに緩いなって感じることが多いんですね。友達みたいな。もちろんそれはそれでアリだと思うんですけど、日常の自分から離れて、非日常にぐいっと自分自身を無理矢理引っ張りあげていくような体験が大事だと思うんです。違う自分を発見してほしい。将来舞台に立つかどうかとは関係なく、みなさんが、ひとりの人間としてしっかり歩いていってくれることを望んでいます。じゃあそんなことで、話を終わりましょう。

# “自分にしかできない何か”を探す航海

高橋彩子（演劇・舞踊ライター）

たかはし・あやこ／現代劇、伝統芸能、バレエ・ダンス、ミュージカル、オペラなど、舞台芸術を中心に取材・執筆している。年間観劇数250本以上。
http://blog.goo.ne.jp/pluiedete

二人の女子が暗闇から現れ、ライトを灯す。照らされるのは一人の男子。彼は、テーブル上で、鉛筆や本をああでもないこうでもないといじり出し——。こうしてトバズニハのパフォーマンスは始まった。その表現は、声を発したり踊ったりと多様だが、どこか断片的でもあり、単一の明快な物語を綴るといった雰囲気ではない。観客は演じ手とともに、『コンパス グルグル』のタイトル通り、進路も終着地点も杳として知れないまま、航海を続けることになる。

ただし、この航海が、修練を積み、必然性をもって行われたことは、迷いのないパフォーマンスから、しかとうかがえる。また、舞台上の出演者や道具が、上手／下手、上方／下方、手前／奥……と、よく考えられた構図で配され、総合演出の伊藤キムの空間構成力を感じさせたことも記しておきたい。つまり企画本来のアマチュアリズムの一方で、“見せる”ことを忘れないプロフェッショナリズムもあったのだ。

そんな中、小さな違和感を覚えたのは〈ピクニック〉を歌う場面。多感な中高生に、かほど素朴な曲はそぐわないのではないか、リアリティに欠けるのではないかとの思いもよぎった。だが、一人の男子が懸命にこれを歌わせようとするのに対し、他のメンバーは気だるそうにしてなかなか応じないという展開に、膝を打った——「そうだ、中高生だって、疲れたりめんどくさかったりするんだよね」と。そこには一つの“リアル”が確かにあった。また、必死に歌わせようと試みる男子の姿は、ユーモラスな情景作りに長けたキムの面目躍如だったように思う。

トバズニハの出演者は、4月の体験ワークショップから選ばれ、稽古を経て8月の本番を迎えたという。そうしたプロセスについて詳細は知らないが、キムは中高生たちに「自分にしかできない何かを見つけようとする気力」を求めたそうだ。無論、“自分にしかできない何か”など、容易にみつかるものではないだろう。それでも探し続けよと、彼は檄を飛ばしたわけだ。探しながら、公演前も公演中も、そして今後も、様々な方向に揺れ動くであろう中高生の心自体、グルグル回るコンパスそのもの。日常とは違う揺れ方・迷い方をしたトバズニハでの体験こそが、彼らの真の羅針盤になることを祈る。

なお、この企画では、稽古場見学、宣伝活動、公演の感想提出などを行う中高生サポーターも公募された。言うまでもないことだが、演じ手だけが演劇を作るのではなく、裏方も鑑賞者も、構成要員である。航海の様々な面を体験した中高生が、独力で大海へ漕ぎ出す日は近い。





# 劇場は冒険する場所

清水幸代（世田谷パブリックシアター 劇場部）

しみず・さちよ／日本女子体育大学在学中に、舞踊・アートマネジメントを学ぶ。2001年文化庁インターンシップ国内研修員として、新国立劇場、日本芸能実演家団体協議会にて研修。その後、「トヨタコレオグラフィーアワード」の事務局運営に携わる。2004年より世田谷パブリックシアターに勤務。公演事業、教育普及事業、フェスティバル運営などを担当。

世田谷パブリックシアターでは、未来を担う人材を育成する、様々な取り組みを行っています。小学生〜高校生に対して、演劇やダンスを体験する様々なワークショップを実施したり、世田谷区内の中学生達が世界的に有名なジャズ・トランペッターの日野皓正さんに指導を受け、ビックバンドを結成し世田谷パブリックシアターの舞台でジャズライブを行う「ドリームジャズバンド」、そして、身体を使ったパフォーマンスに興味を持つ中高生により結成され、様々な表現を学び、創作し、シアタートラムの舞台で発表する「ユース・パフォーマンス」を実施しています。いずれも、演劇・ダンス・音楽の世界に触れ、創造活動を通して、次世代を担う人材を育成し、表現だけを学ぶのではなく、今後、人生を歩む中で必要な「生きる力」（表現力やコミュニケーション能力など）を身につける事を目的に様々なプログラムを行っています。

2012年から実施している「ユース・パフォーマンス」では、中高生で構成されるメンバーでパフォーマンスグループ“トバズニハ”を結成。 学校や在住地域もばらばら、これまでの経験も異なるメンバーが集まり、当初は緊張していたメンバーも、ワークショップを重ねるごとに打ち解け、それぞれの得意分野を伸ばしながら、経験を共有していきました。作品を創造するには、自分の意思を伝えたり、他人の意見を受け入れたりと、常に他者と呼応しながら作品を創造するというプロセスを踏みます。かたや自身の中では、身体を使って表現し、何を伝えるのか、どのような手法で伝えるのか、ということを丹念に追求し自分の内面に向き合う作業をしていきます。

自分を成長させるために、何でも吸収し大きく伸びる事の出来るこうした時期に、プロフェッショナルな力を持つ人間（ここではアーティスト）と出会い、様々な価値観に触れ、ショックを受ける、またはそこに影響を受け、憧れを持つという体験はすごく重要で、それぞれのメンバーが物の見方や伝え方、審美眼を養う良い機会にもなります。身体をつかって、自由に遊び、学び、吸収したことを外の世界へ提示するそんな活動につながったのではないでしょうか。

劇場では日常的に、複数のアーティスト、そして作品の創造を支えるスタッフが出会い、他者とコミュニケーションをはかる中で創作が進行していきます。身体以外の要素（音楽、舞台美術、衣装、照明、音響など）のプランやデザインと、それぞれが培った技術が加わり力を合わせる事で、作品が立ち上がるという体験をしてもらえたと思います。一人では乗り越えられない大きな壁も、様々な人と手を取り合うことで、意外と乗り越えていける。こんな体験が彼らの将来に役立ってくれればと思います。

彼らが今後どんな人生を歩むのかは自由です。彼らの前に広がる大海原に飛び込む勇気を付けてもらえたならそれ以上に期待する事はありません。

# CarroMag. INFORMATION Nov.2013

## 近日開催予定の主なイベント・ワークショップ

### SPTワークショップラボ2013-14『演劇ワークショップの企画／評価を考える』

**日程**…［Vol.1・2 企画立案］2013年12月19日(木)、2014年1月16日(木) 19時〜21時　［Vol.3 評価］2014年1月25日(土) 14時〜16時
**参加費**…3,000円（全3回）　**会場**…世田谷文化生活情報センター セミナールーム
公共劇場で行われている様々な演劇ワークショップの企画立案と評価について、事例を参照しながら考えるレクチャーです。

### 『小学生のための遊ぶ演劇ワークショップ』

**日程**…2013年12月21日(土)、22日(日)　10時〜15時30分
**対象**…小学1〜6年生　**参加費**…1,000円(全2回)
**会場**…世田谷パブリックシアターけいこ場
冬休みちょっと前の2日間、劇場の稽古場に集まって、1年生から6年生までみんないっしょに遊びましょう。どんな演劇をつくるかは、参加してみてのお楽しみ。

### 地域の物語 2014『介助するひと、介助すること』

**日程**…［ワークショップ］2014年1月12日(日)〜3月21日(金・祝)（全15回）
［発表］2014年3月22日(土)、23日(日)（全2回）
**対象**…介助をしている人、介助について学んでいる人、介助に携わったことのある人
**参加費**…6,000円　**会場**…世田谷パブリックシアター稽古場ほか
取材をし、地域を見つめ直し、さまざまな物語を掘り起こし、従来の形にとらわれない演劇やダンス作品をつくって、『地域の物語』として発表します。今年度は「介助するひと、介助すること」をテーマに考えていきます。

## 学芸スタッフから

★2013年は、10月11日に30度を越え、最も遅い真夏日を98年ぶりに更新しました。その前の真夏日最遅記録は1915年10月9日に31.3度(!!)と、2日の違いながら、温度では今年を上回っています。地球さんも生まれてから46億年。大人になって、不規則な生活リズムになっているのかも。いま、11月12日、寒いです。[たば]

★木枯らしが吹き、ようやく秋が来たと思いきや一気に冬到来。でもまた秋っぽい日が戻って来たりして、秋さんも冬さんも、押しつ押されつの大一番を繰り広げておりますね。みなさまお元気でしょうか。私といえば、深まり続ける秋を感慨深く眺めています。大人になるってこういうことでしょうか。生えろ髪。[にら]

## たまにはこんな役 #3

## 編集後記

人間の才能はそれぞれで、いつどこでどうやって開花するかなんて、誰にもわからない。落ちこぼれだった子供が、あとで立派な人物に成長したとかいう例も、歴史を紐解けば見られます。だから、そんなに焦らなくてもいいのかもしれない。でもやっぱり、弾けるような十代は今しかない……！　中高生たちを見ていると、そんな相反する気持ちの葛藤を感じることがあります。

トバズニハ『コンパス グルグル』の舞台には、そんな彼らの「何かを突破したい」という願いと、それから伊藤キムさんをはじめとする講師陣やスタッフの、厳しくも穏やかに見守るまなざしとが、文字通りグルグルと渦巻いていたような気がします。数ヶ月前までは赤の他人にすぎなかった彼らが、ぶつかり合い、助け合って、伸び伸びとその身体や知覚をひろげ、ひとつの作品をつくりあげていく。わたしが観たのは千秋楽でしたが、それは「終わり」というよりも、何かの「始まり」のように思えました。来年度（2014年）もユース・パフォーマンスは開催される予定。中高生であれば、ぜひ勇気を出して、シアタートラムの舞台に立つことに挑戦してみてほしい、とも思います。［ちから］

［キャロマグ］
Vol.3 / Nov.2013

**発行日**
2013年11月25日

**発行**
公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4–1–1
Tel. 03-5432-1526
http://setagaya-pt.jp

**編集**
藤原ちから

**企画**
恵志美奈子、九谷倫恵子、
田幡裕亮、福西千砂都、韮澤大地
（以上世田谷パブリックシアター学芸）

清水幸代
（世田谷パブリックシアター劇場部）

**写真**
梶山かつみ（舞台写真）

**デザイン**
ウチカワデザイン

**印刷・製本**
株式会社アトミ

**協賛**
Asahi アサヒビール株式会社
TORAY 東レ株式会社

**後援**
世田谷区

©2013 Setagaya Public Theatre

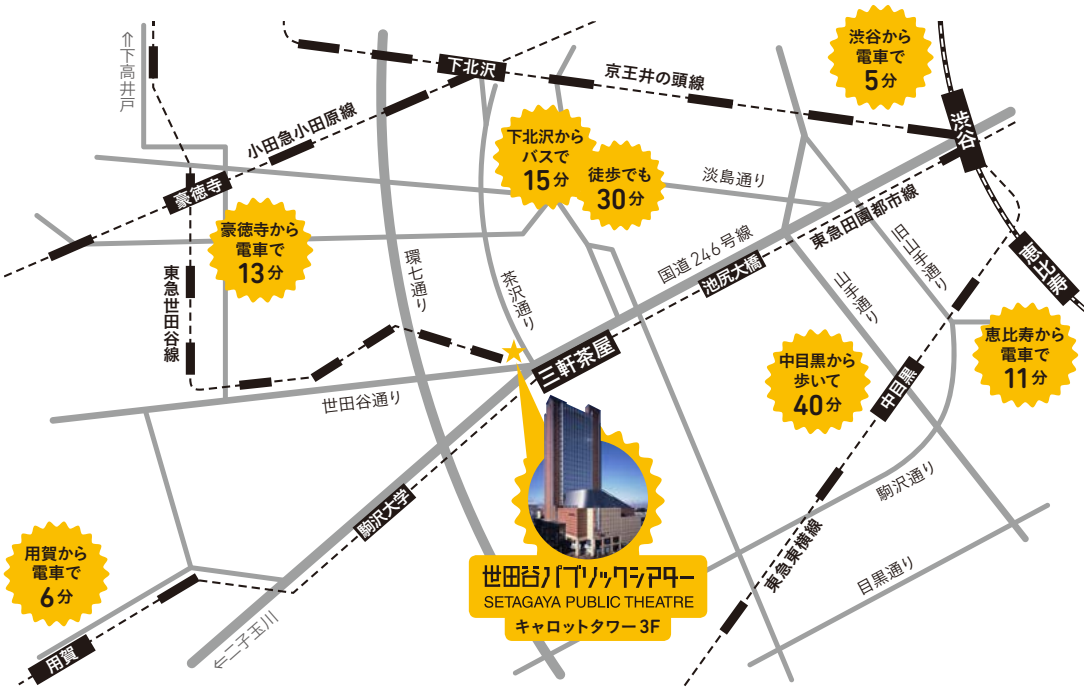
## 世田谷パブリックシアターとは

世田谷区がつくり、(公財) せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター (約600席)、シアタートラム (約200席) の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。

世田谷パブリックシアター (主劇場)

シアタートラム (小劇場)

## 世田谷パブリックシアターへのアクセス





**お問い合わせ** 世田谷パブリックシアター

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー5階

Tel.**03-5432-1526** (代表)　Fax.**03-5432-1559**

**http://setagaya-pt.jp**


世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅前にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。


CarroMag. [キャロマグ] Vol.3 Nov.2013

通算第3号　2013年11月25日発行　(公財) せたがや文化財団・世田谷パブリックシアター

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー5階　Tel.03-5432-1526　http://setagaya-pt.jp